

## 石狩挽歌・樺太「遠淵湖」

北村 弘行

戦前から戦後にかけて二十万人もの南米移民を送り出した旧神戸移民収容所。その建物がそっくり神戸・山の手の高台に残っている。もう七十余年を経た。阪神淡路大震災にも耐え、今は「海外移住と文化の交流センター」として2009年6月3日に再出発した。第一回芥川賞の受賞作になった石川達三の『蒼氓』は、ここが舞台になった。

神戸港から旅立つ家族連れはいったんこの施設に移って、日本での最後の8日間を過ごした。ほとんどは故郷をすてた農民たち。期待と不安に揺れる思いを抱き、語り合い、やけ気味にふるさとの民謡を唄う。

『1930年3月8日。神戸港は雨である。…三ノ宮駅から山ノ手に向かう赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車がかけ上がって行く。この道が丘につきあたって行き詰まったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。これが「国立海外移民収容所」である』

二十四歳の石川は「若気の至り」から、家族移民ならぬ単独移民として、九百五十人の移民団にまじって昭和5(1930)年4月29日、らぶらた丸で神戸を出港しブラジルに渡った。目にしたその人たちの生活は厳しくも悲しい。「私はこれまでにこんなに巨大な日本の現実を目にしたことはなかった。そしてこの衝撃を、私は書かねばならぬと思った」。石川は後日『出世作のころ』で述懐している。

『彼等のみならず殆どの全部の移民が希望をもっていた。それは貧乏と苦闘とに疲れた後の少しく捨て鉢な色をおびていた、それだけに向こう見ずな希望であった。最初この収容所に集まってきたときは、風の吹き溜まりにかさかさとしりぞいてきた落葉の様な寂しさと不安に沈黙してきたが、日をおって海外雄飛の先駆者、無限の沃野の開拓者のように幻想するようになったのである』。

石川はこの小説で、貧しい暮らしのなかで、希望を見出そうとする素朴な日本人を描いた。恋しい人に後ろ髪をひかれながらも弟にしたがって行く佐藤夏、「徴兵逃れ」という非難に身をひそめる弟の孫市。二人の主人公を含めた移民たちの多くは、事実上、日本から切り捨てられた「棄民」だった。だけど、うらみごとは聞こえてこない。

移民を送り出した建物は神戸の山の手になじんでいた。昭和46(1971)年に移民業務が終わって神戸市に移管され市の看護学院となる。

平成7(1995)年1月17日05時46分頃、淡路島北部の北緯34.6度、東経135.0度、深さ14kmを震源とするM7.2の阪神・淡路大震災によって宇治野山にあった神戸海洋気象台は被災、現業部門を残して移民収容所を仮庁舎として1995年4月から1999年9月まで業務を続けた。

船室を模した低い天井、むき出しのパイプ配管は建設当時のままで外壁を這う蔦が時代を感じさせていた。移民の歴史は神戸からはじまった。移民収容所の地下にはマンモスボイラーが置かれている。炊事に風呂にフル活動したのだろう。

## “石狩挽歌”

なかにし礼作詞

浜圭介作曲

北原ミレイ歌

海猫（ゴメ）が鳴くからニシンが来ると  
赤い筒袖（ツボ）のやん衆がさわぐ  
雪に埋もれた番屋（ハンヤ）の隅で  
わたしゃ夜通し飯を炊く  
あれからニシンはどこへ行ったやら  
破れた網は問い刺し網か  
今じゃ海辺でオンボロオオンボロ  
沖を通るは笠戸丸  
あたしゃ浜で  
にしん曇りの空を見る

平成 22（2010）年の正月、NHK の歌番組で北原ミレイの石狩挽歌を聴いてあれこれ月日を過ごしてきた事を思い浮かべた。

### ニシン魚場、やん衆

昭和 20（1945）年 3 月、函館水産専門学校から水産増殖科の実習で留萌のニシン魚場に滞在していた。秋田県、青森県から出稼ぎに来ていた「やん衆」とともに定置網から移したニシンから魚卵を採取し、精子と混ぜ木枠に張った棕櫚皮に受精卵を付着させ木箱に詰めて海へ浮かべる作業を連日行っていた。

夜が明けてから終日木箱を担いで運搬する作業には体力の限界を感じたのも思い出のひとつである。定置網の付近は産卵に群がるニシンが放精する為海水が白濁するのが見られ、群来（ク）を目の当たりに体験した。あれから『鯨』はどこへ行ったのやら！人工孵化実習が終了すると、稲田養鯉事業に移るため留萌から厚真へ移動した。以後、わが目からニシンの姿は消えてしまった。その年、太平洋戦争に敗れた。

### 笠戸丸

笠戸丸は第 1 回移民船としてスタートした。のち、台湾航路、南米航路、再び台湾航路、その後日本海の鯛工船、蟹工船となった。昭和 20（1945）年 8 月 9 日カムチャッカ半島西岸の日魯漁業ウトカエ工場沖で停泊中ソ連機の空爆によって沈められたといわれる。

### サハリンの 8 月 9 日 遠淵湖畔で

厚真に滞在中、学校から指導教官が「樺太の遠淵湖で産する“イタニグサ”という海藻の分布調査に増殖科全員が行くことになった。」と連絡に来訪された。

その頃はすでに日本の戦力は破綻していた。昭和 20 (1945) 年 7 月、稚内まで汽車の旅。出港時刻は潜水艦攻撃を避けるため直前まで未定で、ほぼ 1 週間旅館で足止めを受けていたが乗船の連絡が入り、大泊へ入港したのが 8 月 1 日であった。バスに乗り組み遠淵湖へ向かった。バスは木炭ガスで走り、途中の地区に停まっては郵便物をおろして、新しい郵便物を積み込み、略 3 時間ほど掛けて遠淵湖畔についた。事業場の外観は魚場の番屋そのものだった。今から思えば夏時間で 1 時間標準時より繰り上げた生活をするようになった。毎日午前 4 時起床、夜はランプ生活、油の節約で点灯時間が短く、夜長を持て余した。

現地へ来て 3 日ほど過ぎた頃、当時内地と呼んでいた北海道以南との郵便物による連絡が不能になった。事業場横に千歳海軍航空地遠淵分遣隊が駐屯しており、1 日 1 回大湊まで連絡に水上機が往復していた。隊長の好意で郵便物があれば大湊へ運んでやると言われた。日々の作業は、朝方定期連絡に飛ぶ水上機の爆音を頭上に聴きながら、八尺桁網で湖底を浚え、イタニグサを採取していた。

8 月 9 日、分遣隊から日本は連合軍に降伏した。と連絡が入った。全員が茫然とした。思いおこせば第 1 回ブラジル移民船で活躍した笠戸丸がソ連機の空爆で運命を終えた日と重なる。

10 日には樺太大泊からの脱出行が始まった。留萌・小樽沖でソ連潜水艦による引揚船団が撃沈される悲劇に巻き込まれる事もなく幸運にも生きながらえてきた。World War II と言われた太平洋戦争の結びとなった。 (了)